



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2016.3.1 発行 NO.38

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

座談会 「いま、何が大事なのか」を語り合う その2

前回に引き続き「いま、何が大事なのか」を、全私保連運動推進委員会の岡村委員長、研修部の安達部長、研究機構研究企画委員会の鈴木委員長が語り合います。

【前回の概要】

研究機構は、「乳幼児教育の真を保育園からとらえ直そう」という『冊子』を制作し、「教育観のとらえ直し」ということを実践の中で掘り下げようとしてきました。

運動推進は、全国のブロックシンポジウムの中で鯨岡峻先生（京都大学名誉教授）の養護的かわりの重要性というメッセージを深く理解してもらえるように、平成27年度は参加者から挙げてもらった実践事例に助言をしていただくように企画しました。

研修部は、「子どもが権利の主体者」であることは国際法で守られているという視点に立って、子どもには学ぶ権利、発達する権利、意見を表明する権利がある、自分たちの仕事はその「権利を守る仕事」をしていると捉えて研修の組み方を変える試みもしました。

今回は、保育の現状とそれぞれの委員会・部会の役割について、少し突っ込んだ話になり、3つの委員会・部会がしっかり連携していくことが確認されました。

【出席者】（敬称略）

岡村 斉●全私保連運動推進委員会委員長

安達和世●全私保連研修部部长

鈴木眞廣●全私保連保育・子育て総合研究機構代表
同機構研究企画委員会委員長

*お話の進行は、鈴木委員長

「第2の教育観」へシフトする

鈴木●（いまの教育のスタンダードは）日本では明治以来、たかだか150年くらいの歴史しかないんですよ。もっとその前の長い時間は、そうじゃない育ち方、学び方をしてきたのに、明治政府がすすめた教育方法が正しいって、いつの間にか自分たちも思い込んでいた

のではないかと。けれども、これからの時代はそうじゃない。戦後70年、もっと複雑になっていく社会の中では、先人がつけた意味をただ覚えるだけの学びだけから、「第2の教育観」へシフトしていく必要がある。

今回、刊行した『冊子』、「乳幼児教育の真を保育園からとらえ直そう」でいえば、特別委員の久保健太先生（篠原保育医療情報専門学校こども保育学科学科長）は、『先に生まれた人たちが世界につけたものやことの名前や意味を、子どもはただ覚えていく営みを第1の教育観とすれば、子どもが自ら身をもって世界から自分なりの意味を引きだして、自分なりの意味を与えていく営み』が第2の教育観と説明している。

これまでは第1の教育観に偏っていたわけで、自分たちがこれから考えていかなければいけない教育は第2の教育観。本当は、こちらが第1だよ、といたいわけだけどね。

ただ正直いって、この『冊子』ではまだ、打ちだし方としては弱い感じがするのは「これが新しい教育観ですよ」といいきっちゃうと、上から押しつけたみたいになるから、そうはしたくないというジレンマが研究機構の中にある。そこで、6つの扉をキーワードにして「一緒に考えてみましょう」と投げかける形で、実践現場と協働の関係を創りだしたい願いがある。

安達●これだけを読んだだけではやっぱり難しい。ハイレベルな構成だし、文言の使い方もね。“ではどうぞ”っていわれても、“はいわかりました”とはいえないと思うんです。

昨年10月13日、横浜市私保連主催で「保育のグランドデザインを考える」をテーマに、汐見稔幸先生（白梅学園大学学長）の講演会が行われました。その時汐見先生は、「グランドデザインって『子どもへの願い』や『社会への願い』を自分たちが描くことだよ」と話してくださいました。そして、この6つの扉の一つひ

とつを開けてくださったんです。これって、「昔、自分たちが遊んでいた時の話で、そういうことの中に大切なことがあったということだよ」と話してくださいました。

鯨岡先生の運動（推進）の展開のように、このグランドデザインもやっぱり汐見先生なり鈴木先生なり研究機構の方たちが、これを持って全国行脚をすると、どんどん浸透していくと思うんですよ。このような大局で捉えることが大切で、それが“日々の生活”と行ったり来たりするって考えることが大事ですよ。

“この保育園いいな”とか“こんな保育園になりたいな”と私が思う保育園って、やっぱりそこに生活がある。子どもと大人が生活する中でいろんなことを学び合ったり伝え合ったりする、そういう保育園ってやっぱりいいなって思うんですよ。保育園の学びとか教育って、こういうところにあるのかなって思うから、「大局の話」と「実践」をつなぐような展開ができれば、それは鯨岡先生のお話も同じだと思っています。鯨岡先生は、エピソード記述という一つの手段をもって伝えてくださいます。

エピソード記述と指導計画

岡村●私の園でやった時も、エピソード記述自体が最初はなかなか理解できなかったんです。エピソード



乳幼児教育の真を
保育園からとらえ直そう
—日本の保育・子育てのグランドデザインへの招き

A5判・32ページ
本体500円+税
公益社団法人全国私立保育園連盟
<http://www.zenshihoren.or.jp/>

記述って1日の保育の中で、あれだけのことを書けるわけがないという思いがあるんですね。ただ、鯨岡先生が、「そんなに時間をかけることじゃない。自分の心が動いた時にちょこちょこっと走り書きをしておいて、この思いを人に伝えたいなって思った時に、文章にする。自分の心はこんなふうに動いた、人に伝える時にはそういう文章にする、それがエピソード記述なんだ」といわれた時に、「それなら自分たちもやれるかも」と思ってやり始めたんですよ。

だからいま、安達さんがいわれたように、こういう『冊子』が出たら、やっぱりそこに行き、ちゃんと解説をしてつなぐ人がいると、もっとわかりやすいのかなと思いますね。

鈴木●A4判の用紙に何枚も書くようなエピソードは、年に1、2回あるかどうかで話なので、今、岡村さんがいったように、日常の中ではもっと短いエピソードがいろんな場面で起こっていて、ね。

岡村●そう。だから、ほんの数行でいいんですよ。自分の心が動いた時に、それをメモっていて、職員全体に伝えたいと思った時、自分の言葉で整理をして伝えるというのがエピソード記述なんです。

その園の中に「じゃあ、やってみようか」という雰囲気や雰囲気がどんどん広がっていくことはとてもいいことです。だから、こういう『冊子』を出していただいたことはすごくありがたいので、そこをより実践的に解説してもらえよう時間をつくってもらえると、よりいいのかもしれない。

鈴木●今までは指導計画があって、その書かれた指導計画どおりにうまく展開されたのかとか、子どもがそれにどう興味を示したかと、記録を録ってきたよね。だけど、今、岡村さんが紹介してくれたエピソードは、そういうものとは違うよね。

岡村●違います。まったく。

鈴木●保育の情景に子どもと保育者の感情の対話を書き加えていくことに、どういう意味・意義があるのかがしっかり伝わらないと、録ってみようという気にならないわけだね。

安達●エピソード記述って、心が動いたことを書いて、それをもとに考察をする。ならば、この考察ってということが次につながるわけじゃないですか。

自己評価も次につなげるためにやることだし、同じ「やる」にしても自分自身の心が動いていかないと次

につながらないんだから、こういう提案は、とても大切だと思う。いまは、指導計画を考える時にエピソード記述を活用しようという方向に動いていますよね。どうですか。

岡村●そこまで動いていますか。

鈴木●いまは関心をもち始めた人が試み始めたぐらいで、きっとまだ、みんなが活用するっていう方向に動いているところまでは、いけてないんじゃないかな。

岡村●まだいけてないように、私も思うんだよね。

鈴木●保育雑誌などの指導計画を見ても、やっぱり保育者側からの働きかけの言葉が多いよね。保育指針には「主体性」って書いてあるけど、指導計画が保育者の働きかけばかりになっていて、子どもの主体性が見えてこないなあってすごく感じるんです。

安達●確かにね。それにどの保育雑誌も「指導計画」って、全園に共通するわけではないのに“こんなふうにしましょう”と提案するのは、いまの時代にはそぐわないような感じがします。

私も保育雑誌の指導計画の作成に以前かかわったことがあります。自分たちが作る指導計画は思いを込めて出すじゃないですか。でも、それを全国共通にするためにはどんどん枝葉を取って、北でも南でも通用するような形に変えて提案することになる。そのような指導計画ってどうなのかなと。

鈴木●だいたい、そんな「指導計画」を作って提案するのがおかしいよね。

一昨年、イタリアのレッジョ・エミリア市に行ったけど、世界が注目しているレッジョでは、学びの始まりってというのは子どもの興味、関心なんだよ。大人から働きかけることもあるけれど、基本的には、子どもから生まれ出てくるものを、一緒におもしろがったり、悩んだり考えたりしながら、子どもとともに学びを創りだしていくのが大原則。そこが、いまの日本が常識として持っているもの、つまり保育者が働きかけることからいつも始まるのと全然ちがうんだよね。

研究機構で以前に紹介したニュージーランドのラーニング・ストーリー（学びの物語記録）というの、子どもの学んでいる（学ぼうとしている）姿に関心を向けて、子どもの心の動きを理解し、大人がどうサポートしたらこの学びがより確かなものになるか、しっかりしたものになるかっていうことを見つけていく、そういう意味では、いままさにエピソード記述で語った

こととすごく重なるんだよね。

安達●研究機構がニュージーランドのラーニング・ストーリー（学びの物語記録）の実践をかみ砕いて紹介してくれた、ワークブック『保育園における「子どもの育ちと学びの分かちあい」への招き』（初版2008年、改訂版2012年）が出されていたから、その後の鯨岡先生のエピソード記述のお話が全私保連の中では、文化として少しずつ定着していったというのはあると思いますよね。

研究機構の役割と特殊性？

鈴木●私たちが投げかけたことが次につながっているとしたら、とても嬉しいけど。研究機構には企画とかツールをいろいろ開発してほしいけど、それを自分たちでやるんじゃなくて、研修部とかいろんなところへ出して、それを使うように提案する、そんなふうに全私保連からは期待されているんですよ。

安達●それも一理はあると思うんですよ。研究機構の方たちがプレイヤーになってしまうと、何ていうのかな、時間が削られちゃうじゃないですか。だから、一つのものを出していただいて、それを他の部や委員会がどう展開するかという道筋をつけてくださるのもありですね。

さっきのニュージーランドのラーニング・ストーリーのワークブックなんかそうだったじゃないですか。ああいうふうな形を、この保育のグランドデザインでもみんなできるとはできると思います。で、あとは、汐見先生、久保先生に頑張っていただくとかという手もあるのかなとは思っています。

岡村●だから、やっぱり解説してくれる人が必要だと思うんです。「これを作ったからやってみる」っていわれても、それこそエピソード記述と一緒に、どこから入れればいいのかわからない状況になってくる。

そのあたりの解説を各部や委員会にさせていただいて、「こういうふうに使っていい」「こういう意味でつくったんだ」ということを、私たちがしっかり理解をしないと、その後の展開がうまくすすまないと思うんですよね。

鈴木●そうだよ。今の日本にとってどんなことが大事なのかを考え、人間が人間になるための原理・原則を哲学して、保育実践につなげていきたい、そんな想

いでやっているんだけどね。

安達●研究機構って、各部・委員会とはちょっと違うところに位置づけがあると思うんです。

研修部は、全私保連の組織の一つの部門というのをすごく意識しているんです。部会でも、全私保連の方針や、いま取り組んでいるものとかかけ離れないようにと、毎回プレッシャーを感じるんですね。なので、こちんまりしちゃうっていうか、それでいいのかって葛藤もあるんです。だから、全私保連の中で運動を展開するのであれば、研究機構が「学問知」のようなものをつくったら、それぞれ各部・委員会が役割を分担するというのが、組織として大切だと思っています。

けれども、それぞれがいまバラバラになっていて、この保育のグランドデザインも事務局会議（各部・委員会の長が集まり、全私保連の事業内容を検討する会議）の中で学び合えたかという、まだそういう段階には至っていないし、これが全私保連の推しすすめる方向性なのかということも、確認されていない感じです。なのでまず、そこからやって、広めていくことが必要だと思うんです。

岡村●「子どもの育ちを支える運動」というのは、全私保連の中核の運動だっていわれますが、この運動が今日話したみたいに各委員会や部の皆さん等々、すべての人たちが理解してくれているかといえば、必ずしもそうではない。それを中核とするのであれば、やはり、そこに向かって各委員会・部の人たちも参加する体制づくりが必要だと思うんです。

安達さんがいわれたように、いまはまだ、それぞれがバラバラに動いているような気がしますね。「子ども



の育ちを支える運動」というのを中核としてやるんだったら、研究機構の方と一緒に、この保育のグランドデザインも一緒に勉強していきましょうという形でやっていくかどうか、そこを整理しないといけないですね。

まずは連携づくりから

鈴木●保育総合研修会にしても全国研究大会にしても、それぞれの委員会が分科会を一つずつ引き受けてやりますよね。あれも、それぞれは一所懸命に取り組んでいるのだけれど、全体としての統一感ももてているかという、そうなれてない。

安達●提案はしているんです。同じ方向っていうか、同じ土俵で研修を組んでくださって毎年提案するんですけど、なかなかうまくいかないですね。この「保育のグランドデザインを展開する」というのは、いいチャンスだとは思うんですよね。

鈴木●いま、岡村さんがいったみたいに、少なくとも事務局会議の中でみんなが共通理解する。そこができないと、本当に運動展開なんかできないものね。

岡村●全私保連の運動体として、例えば、さっきいった「子どもの育ちを支える運動」というのを大切にするのであれば、それを「こういう育ちを支える運動をつくりました。これが中核の運動です」といえば、みんながその方向を向いて動かないと。

だから、「保育のグランドデザインも、運動推進と一緒にいまからやっというと思います」って。それを各部・委員会が共通認識をもってもらい、全私保連はそれに向かっていく、という一つの大きな目標をちゃんと立てる。「考えていることがバラバラだ」といわれないように、常任理事会（会長、副会長、常務理事で構成される）との連動も必要だと思います。

安達●「方向性を示せていない」と、外部の先生たちからもいわれるんですよ。

岡村●そこが、私たちの大きな課題だよな。

鈴木●そうだね。制度の話には、共通の想いや願いがあるけれど、保育や保育の質の話になると、それぞれの園の歴史や想いや立ち位置に違いがあるからなのか、踏み込めないよね。遠慮が働いてしまうのかな。

安達●でも、この1、2年は保育の話も少し出るようにはなりましたよね。

岡村●出るようにはなったけど、じつは、そこが一番大事なんですよ。私たちが一番大切にしないといけないところなのに、やっぱり制度問題が目の前にぶら下がっているものだから、そっちの話ばかりしてしまいますけど、ね。

安達●こんな保育をしたいからといって制度づくりに働きかけるわけだし、予算を取ってくるわけですし。

岡村●私なんか、どこへ行っても、その類の話はするんですけどね。

鈴木●多分、みんなが期待したものは、日々の保育実践のあり方の話というより、国に対して要望を出すために裏づけたい形としてのデザインが早くほしいみたいな気がする。でも、仮に形ができて、実践がついていかなければ何にもならない。

安達●でも、この運動を展開することで、いろんなところの保育実践が集まってくるわけじゃない。だって対話を繰り返していけば、どんどん実践が集まってきて、それをエビデンスにして次に生かせるじゃないですか。1年単位の仕事じゃないので、研究機構から出された今回の冊子は、「これはたくさんのエビデンスを集めるためのテキストです」っていえばいいんじゃないですか。

岡村●私も、それくらいの感じでいったほうがいいと思いますね。

鈴木●やっぱり国を動かすっていうのは、「私たちは実践を通して、これだけ子どもたちのことを考えてやっているよ」とか、「いまの時代、社会というのは、例えば、子どもの育ち方にこういう課題があって、そのためには何が必要なのか」をきちんと考えて、一部の人の提案やアイデアではなくて、8,000園以上の会員が、みんなで協同してまとまって挑戦しているんだという姿勢が国を変えていくと思うんだよね。

制度を変えることなら一致団結しやすいんだけど、保育実践となると、個々の現場というのは多様なものね。

岡村●私たち保育の現場が協同して変われば、保護者も認めてくれると思うんですよ。そしたら全国的な動きになって、私たちがいまやろうとしていることって大事だってわかってくれる。「力じゃない、小さい時には心がしっかりと育てないとダメだ」「その心を育てるためには、養護的かわりが保育(者)にとって重要なのだ」というようなものが、保護者にも伝われば、

大きな社会運動になると思うんですけど。

いかんせん、最初の話に戻りますが、これをいかにして伝えていくのか、すべての組織をあげて立ち向かったとしても本当に難しい。

鈴木●やはり、自分たちが受けた教育が染み込んでいるものだから、もっと子どもの声に耳を傾けようよ、子どもの思いから始めようと訴えても、自分たちの描いてきた保育のイメージとつながりにくいこともあるんだよね。だから、子どもの心に寄り添うとか、子どもの興味・関心から始まる保育というのは、こんなことだよ、とイメージが可視化できるようなエピソードや実践をどれだけ語れるかっていうことが、最初の一步として必要だろうと思うんだけど(「保育通信」4月号に同封して発送予定の「わく ワーク シート」は、それにチャレンジしています)。

安達●あと、いま行政が、保育士が記録にどれぐらいの時間をかけているかという調査を一斉にしているじゃないですか。そういう動きって、いままでなかった。(記録業務を)見える化をするチャンスでもあるので、そういうことを保障するために、「制度はこうしてください」というようにつながっていくといいと思うんです。

岡村●社会の目が、保育士の働き方や保育の実態のほうに少しずつ向いてきている感じで、いま、チャンスなのかもしれないね。

鈴木●研究機構では、平成27年度の初めから、運動推進委員会や研修部など、他の部・委員会と合同会議したいと話題になっていたけれど、なかなか時間が取れなくてきた。事務局会議でも、各部・委員会からの提案を受けて、皆で話し合う時間をつくりたいと始めたけれど、いつの間にかなくなっちゃった。

でも、そういう時間もすごく必要だなと思うんだよね。今日のような話し合う機会を、例えば1泊2日で年に何回かつくれたらいいですね。

岡村●それこそ、本当に年に1、2回、1泊2日ぐらいで、みんな集まって、委員長だけではなく、委員・部員全員でそういう話ができるのが一番いい。年に1回だけでもいいですよ。

安達●合同委員会みたいなものをね。

岡村●やりましょうよ。初めは、研究機構と研修部と運動推進委員会だけでもいいですから。

鈴木●ぜひ、やりましょう。今日はこうして語り合っ

なんだか手応えがありましたね。

今日は、本当にありがとうございました。

岡村・安達●ありがとうございました。

(まとめ/片山喜章●保育・子育て総合研究機構研究企画委員会副委員長)

編集後記

◎組織全体で子どもの有能性と保育実践を語り合う

3つの委員会(部会)の代表が語り合った内容を2回に分けて掲載しました。話がすすむにつれて“保育の質の向上”に関して、「組織(全私保連)をあげて語り合おう!」そんな願いが膨らみ、そして共有されていきました。出席者も陪席していた私も、これまでそれぞれの委員会(部会)だけでバラバラに議論してきた“閉鎖性”“非効率性”に気づかされた感があります。次年度は合同研修を試行する提案がなされ、とても有意義な座談会でした。

これまで“子どもたちのため”に「制度」に強い関心を寄せて学習し、運動し(ていただき)、その成果が実って、社会全体の認識が「子育て支援策」を充実させる方向にすすみ始めたように思います。

しかし、ではどんな実践が“子どもたちのため”なのか、と問われれば、いかがでしょう。日本全体を見渡すと、各園各様で曖昧模糊とした現実が点在しています。その園の歴史や文化、民間の独自性の名の下に「各園各様の実践を尊重する」という考え方を越える次元の運営観、運動論には至っていないようです。換言すると、少なくともこの25年間、「保育指針」が保育実践の拠り所になっているとはいえない状況が続いてきたということでしょう。このような状況を鑑みて、研究機構は先般、「6つの扉」を示し、7つ目の扉を各園で論じていただきたいと提案しました。

その園の「園文化や独自性」は、確かにその園の保育内容を下支えする大前提です。けれども、そこに、人権主義に立った子ども観や最新の知見を加味した“子どもたちのため”の実践がなければ、制度で勝ち取った恩恵を無駄にしかねないのでは…。保育のグランドデザインは、「子ども」と「保育」をより深く語り合うグランドチャレンジでもある、そんな認識が必要ではないでしょうか?

(ご存知のように)幼稚園界は、教育の質の向上と自己評価や第三者評価の手立てとして「公開保育」を推進し、組織的に取り組んでいます。東京大学大学院教授の秋田喜代美先生も、「保育の質を向上させる方法として、お互いに保育を見せ合う大切さ」を説いておられます。いろんな地域で、保育を実際に見せ合い、語り合い支え合う、そんな日常を私たち自身がつくりだし、そこで生まれる各園各様の“気づきの力”で「7つ目の扉」を創りだす、それは、子どもたちが切に待望している“願い”のように思えてなりません。

昨今、こども園制度の施行とあいまって、少しずつですが「教育・保育」に対する議論(危機意識)が深まり、議論する機運が出てきた感があります。

『保育制度検討会をはじめ、予算対策委員会において「質の改善」は常に重点項目になりますが、人それぞれ「保育の質」についての捉え方がまちまち…』『(この状況に対する)共通認識を深めていく必要がある…』『(運動機能、言語感覚、音楽感覚等の)能力を高める保育実践は、ある意味では偏狭な視点に立った保育実践…』これは、平野・全私保連常務理事が「子どもの育ちを支える運動シンポジウム in 近畿ブロック」(平成25年6月28日)のレジュメに執筆されたメッセージです。

鯨岡先生の『「私は私」「私は私たち」』に習うなら、「各園は各様」「各園はニッポンの保育園」という両義性の中で「子ども主体」のための「各園の主体」が発揮されて、新時代をつくりだしたいものです。

研究機構も“取り組みやすさ”をキーワードに「動画を用いたわくワークシート」を制作し、近々お届けできる見込みです。子ども観の「捉え直し」に各園が取り組む。各園に「捉え直し」を促し、後押しする取り組みを組織が一丸となって全国展開する。

その両輪が動きだすことを願って、今年度の「ニューズレター」を締めくくりたいと思います。

(片山喜章●(社福)種の会理事長、神戸常盤大学客員教授)



わくワークシート
新しい教育観シリーズ1-1(16分の動画DVD付)
「保育通信」2016年4月号に同封されます。
2ページに掲載の「保育のグランドデザイン」を
提言した冊子と併用して、ご活用くださいませ。

◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp